

音声が降(くだ)る

黒田 裕

奨励者紹介〔くろだ・ゆたか〕

日本聖公会ウイリアムス神学館館長

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、¹霊²が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あつけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

(使徒言行録 2章1—11節)

聖霊降臨と

「炎のような舌」

はじめまして。黒田裕と申します。私は日本聖公会の司祭で、現在は京都御所の西側にありますウイリアムス神学館の館長をしております。今、私は「はじめまして」と申しました。が、実はこのキャンパスを訪れるのはこれが初めてではありません。私は他大学の学生でしたが、下宿はすぐその相国寺の北側にありました。ですので、何度か生協の食堂で食事をしたこともあります。「隣の芝生は青く見える」なのではないでしょうか。私の通っていた大学にも生協はありましたので、それほど変わりはないはずなのですが、美しいキャンパスと相俟って、なぜかこちらの食堂の方がおしゃれで美味しいような気がしたものです。人間の舌というものは結構曖昧なものなのかもしれません。そういえば目をつぶったり鼻を押さえるだけで、食べ物の味が分からなくなるとも聞きます。

こんな事を申しましたのも、今日は「舌」の話をしようかと思ったからです。というのは、キリスト教のカレンダーは6月に入り聖霊降臨日、いわゆるペンテコステに入ったからです。先ほどの聖書にありましたように、この聖霊降臨を報じる今日の箇所では、聖霊という目に見えない神の働きが降って教会が誕生した、ということが書かれています。そして、そこでは聖霊が「炎のような舌」で言い表されています。「舌のような炎」ではなく、「炎のような舌」です。

ただ、舌といっても先ほど話したような味覚ではなくて、私たちが発する声や言葉に関係する舌についてです。そこでまずは、私自身が近年気になっている、舌を巡る、あるお話をご紹介しますと思います。

アゴの進化と

睡眠時無呼吸症

何年か前にNHKで「病の起源」という番組がありました(1)。ある晩、何気なくつけたテレビで放送していたのですが、なんとなく気になってそのまま見入ってしまいました。その時テーマとなっていたのは「睡眠時無呼吸症」でした。寝ている間に舌の付け根が喉のほうに下がる。それによって息をする気道がふさがってしまう病気です。呼吸に問題が出るのはもちろんのこと、場合によっては窒息して死に至る、という怖い病気です。そして、その起源として、人類のアゴの発達の進化が取り上げられていました。アゴの進化といっても、実際は退化、といったほうがいいのかもかもしれません。

番組によれば、数百万年前の私たちの祖先はもともアゴが大きく発達していて噛む力も強かったそうです。ところが、石器を使う時代になると、道具を使って肉を切ることもできるようになり、だんだん柔らかいものを食べられるようになりました。柔らかいものを食べられるようになると、それまでよりも噛む力が弱くなってきます。前までの大きくて強いアゴがだんだん要らなくなってくるわけです。そして時代が下がるにつれて、アゴは小さくなり噛む力が弱くなっていきました。しかし、アゴが小さくなっていったものの、舌べろはアゴと一緒に小さくなるということがありませんでした。あまりアゴを使わなくなったのと逆に、舌のほうは発達してよく動くようになったのです。それでいろいろな言葉が話せるようになったそうです。そして、このアゴの小ささに比べて舌が大きい、ということが、先ほどの睡眠時無呼吸症につながっている、ということです。

番組ではさらに、この病気に悩まされている、ある女の子のことが紹介されていました。彼女は幼児の頃からこの病気で大変な思いをしてきました。番組の取材当時では小学生となっていたのですが、最近新しい治療法が取り入れられたと言います。それはバネのついた器具を寝ている間にアゴの内側に取り付ける、という方法です。そして、実際、半年か1年ででしょうか、その器具を装着し続けたことでアゴの幅が6mmも広がりました。広がることで舌の収まるスペースが広がって息がしやすくなり症状が改善したということでした。

舌の動きと音声言語

一方、ボノボというチンパンジーに似たサルを使ったアメリカの実験も興味を惹くものでした。そのサルは、驚くべきことに、トレーニングによって200もの単語を識別できると言います。番組では、大型テレビのようなモニターに、九つに区切られた枠があって、一つの枠に一つの画像(写真)が映し出されており、その画面の前にサルがいる場面が出てきます。そして、たとえば「コーヒー」という音声を聞かせると、そのサルはきちんとモニターに映っているコーヒーを指さすのです。

しかし、私の興味を惹いたのはむしろここからです。それだけの単語を覚え識別できるものの、それでもなお、言葉を音声として発することはできない、ということです。なぜでしょうか。アゴばかりではなくサルは舌もとても大きいのですが、前後には動いても左右には動かない。そのため、言葉を発声することができない、ということです。

あらためて知ったのですが、私たちがいろいろな言葉を声で話すことができるのは、舌が前後に動くだけで

はなく、左右に動かせるからだそうです。舌が左右に動くことによって、舌の付け根あたりにある「声道」（声の道）という空間で息を変化させることができます。この声道という空間で息を変化させることができ初めて言葉や音声を発することができるのだそうです。ところがサルのほうは、声道と呼べるほどの空間がありません。アゴいっぱいに分厚くて大きい舌が横たわっているイメージです。こうして左右に舌を動かすことができないためにサルは言葉を発声することができないということでした。

現代の言語状況の

象徴として

私はこの番組で知ったアゴや舌の進化の歴史や発声のメカニズムをととても面白いと思いました。というのは、この事実とそこからくる現代の病とが、身体や物理的な問題だけにとどまらないのではないか、と思えてきたからです。このことは、何か文明が高度に発達した現代に生きる私たちの、ある課題を象徴的に表しているように思えてくるのです。

ひとと言えればそれは、文明が進めば進むほど、かえって人間は、ますます言葉を失ってきているのではないか、ということです。あるいは息の詰まりそうな言語状況とも言えるかもしれません。確かに、20年前と比べても社会のIT化は格段に進み、おびただしい数の情報や知識、言葉とに私たちは取り囲まれています。そして私たち一人ひとりが日々、電子メールやSNSによって多くの言葉や情報を発信していることでしょう。しかし、それと反比例するかのように、私たちは本質的には言葉を失ってきていると思わざるをえないのです。別の言い方をすれば、どんどん言葉が空虚になってきている。空っぽになってきて窒息しそうになっている。もう少し言えば、意味ある言葉というのでしょうか。聞くに値する言葉、語る価値のある言葉、ひとを生かす言葉、命を与える言葉が、どんどん貧しくなっているのではないのでしょうか。あるいは、逆に言えば、私たちは、そうした命に満ちた温もりのある言葉に飢え渴いている、と言ってもいいのかもしれません。

「炎のような舌」と

音声言語

では、聖書の時代はどうだったでしょうか。イエスが逮捕され十字架上で苦難を受け、亡くなったのち3日後に復活の出来事がありました。それから50日後のことです。その日は折しもユダヤ教の五旬祭というお祭りの日でした。今日の聖書、使徒言行録は、この日に聖霊が降って教会が誕生した、と語っています。

ここで興味深いのは、冒頭で述べましたように、聖霊というものが「炎のような舌」で言い表されていることです。私はこれまで、この「舌」と、あとに出てくる、めいめいがいろいろな言語で話し始めた、という記事とを関連づけたことはありませんでした。

しかし、先ほどの番組で知ったのは、舌と言語の発声とは密接につながっている、ということでした。舌は言語や音声を左右するわけです。そこから、はたと気づかされるのです。聖霊が降るとは、言葉が降った、声が降った、あるいはまた、音声降った、ということができないのではないか、と。

考えてみると、「舌」という言葉は日本語でも音声言語（声で発した言葉）を表します。語る言葉に気をつける時には「舌を制する」と言いますし、それが失敗すると「舌禍」となります。最近でも、政治家のまさに舌禍が報道を賑わしています。もちろん私自身も時に舌で失敗をすることがあります。いずれにせよ、舌との関係

でこの箇所を見ますと、聖霊が降り、使徒たちがめいめいいろいろな言葉で話し始めた、というのは、さまざまな地方ごとの言葉で、神の良き知らせを語るよう、神の音声言語が授けられた、ということになるのではないのでしょうか。

裏を返せば、聖霊が降る前には、人々は、声で発せられた、意味ある言葉に飢えていた、ということが言えます。現代がそうであるように、人々は虚しい言葉に取り囲まれて絶望していました。かつて彼らを支えていた言葉とは、今でいう旧約聖書でした。そこにはもともと彼らをエジプトでの奴隷状態から解放した神との約束の言葉が書かれていました。より具体的に言えば、それは律法と預言の言葉でした。

しかし、民を司る祭司たちは預言を無視し、自分たちにしか守れない祭儀的規定を押し付けて民衆を分断し差別するばかりか、経済的な搾取をしつつ大国ローマにすり寄って、「生きているうちが花なのよ」と現世利益ばかりを追い求めていました。

また本来、民の指導者であるはずの律法学者やファリサイ派と呼ばれる人たちは、やはり型通りの律法を民衆に押し付け、かえって律法の本当の精神をないがしろにしていました。律法とは、もともと、奴隷から脱出したイスラエルの民つまり神の民が、荒れ野での生活を神と共に共同体として生き抜くために与えられた神からのいわばプレゼントでありました。律法は神の憐れみと愛の発露だったのです。ところがイエスの時代には、律法は骨ぬきとなりました。形骸化し、民衆にとっては虚しいものとなりました。むしろ人々を窒息させるような言葉になっていたのです。

「分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」

こうした民の指導者たちからはもはや聞くことのできない、意味ある言葉、ひとを生かす言葉、慈愛に満ちた命を与える声、に人々は飢えていたのです。その飢えを満たすべく神から降されたのが、聖霊だったのではないかと思えるのです。

そして、この聖霊については、新約聖書の別の箇所で次のような記述もあります。「ある人には^レ霊、によって知恵の言葉、ある人には同じ^レ霊、によって知識の言葉が与えられ（中略）ある人にはこの唯一の^レ霊、によって病気をいやす力（中略）ある人には異言を解釈する力が与えられています」（コリントの信徒への手紙一 12章8—10節）。これによれば聖霊は、一人ひとりにさまざまな賜物を授ける働きをしていることが分かります。今日の箇所でも「炎のような舌」は「分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」とあります。一人ひとりに、いろいろな賜物が与えられたということがここからも分かりますし、ちょうど、舌が上下はもちろん前後左右に動くことによって音声をさまざまに変化させられるように、多様な言語、さまざまな音声で語るよう求められていることに気づかされます。

さらに福音書で復活後のイエスは、不安と絶望の中にあつた弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」（ヨハネによる福音書 20 章22節b—23節a）と語っています。聖書にいう「息」は「風」とも訳せます。その風が吹き入れられることは、命が吹き込まれることでした。今日の箇所でも、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」とあります。また、聖書にみる「罪」は、現代とは違って、死と直結しており、罪イコール死、といっても過言ではありませんでした。だとすれば、聖書にみる「罪の赦し」とは、生きることが赦されている、と言い換

えられると思います。そこから考えると、イエスのこの言葉は、煎じ詰めれば、神はあなたに「生きよ」と言ってくださっているよ、ということをいろいろな人々に伝えなさい、それが約束だよ、という意味になるのではないのでしょうか。

こうして私たちは、聖霊によって多様な音声が授けられ、意味ある言葉、ひとを生かす言葉、慈愛に満ち、新たな命を与える言葉を、声として、しかもさまざまに発するように招かれていると言えるのではないのでしょうか。

また、そうした言葉はキリスト教の理解では、イエス・キリストの十字架と復活という驚くべき業によって支えられています。今を生きる私たちもまた、聖書の時代の人々がそうであったように、空虚な、死せる言葉に取り囲まれています。しかし、そんな私たちのために神はイエスを遣わし、イエスはご自分の身体を、その命を、ささげてくださいました。そしてその身体と命とは、よみがえらせられました。死せる私たちの言葉と命とは、こうして新しい命を与えられており、私たちは、新しく生きることが赦されています。大学での学びにおいても、皆さんが新たな命を受け、そのような言葉が一人ひとりの内で血となり肉となり、音声となっていくことを願ってやみません。

〔注〕

Ⅰ 日本放送協会 NHKオンライン「NHKスペシャル 病の起源」第Ⅰ集催眠時無呼吸症～石器が生んだ病～ <http://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20080413>

2019年6月13日閲覧。最初の放送は2008年4月13日のようだが、筆者が視聴したのは2013年5月18日夜に放送された回と思われる。

2019年6月26日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録